

八溝山を中心とする関東と奥州の境界 の研究

Published : Keiichi Yorikane, 2005.

サマリー

本論文は、本論文は、福島・栃木・茨城の三県境の交点に位置する八溝山（1022m、茨城県最高峰）を「関東と奥州の境界」の象徴として捉え、その周囲に集積する境界的要素を持つ神社・史跡群を包括的に考察したものである。

【論文の主な論点】

八溝山と街道の構造: 関東から奥州へ至る内陸部の街道は、八溝山の東西両脇を通過する「双頭の軸」を形成している。

西側（那珂川沿い）：旧陸羽街道が通り、軍事上の重要拠点である白河関や境の明神などが散在する。白河関は5世紀頃に創始された可能性があり、国界（栃木県側）は分水界となっている。

東側（久慈川沿い）：久慈街道と茨城街道が通り、祭祀上の重要拠点と目される都都古和氣神社（延喜式内社・大明神）が存在する。

【境界の要素】

白河関と境の明神: 白河関跡（旗宿）は軍事拠点として優れており、国界付近には中筒男命と衣通姫命の男女二神を祀る境界神「追分の明神」が鎮座する。旧陸羽街道の国界にある「境の明神」も男女二神対向の祭祀形式を持ち、古関に祀られた「関明神」の体裁に合致するという説がある。

八溝山の信仰: 八溝山は、久慈川や那珂川支流の水源であることから農耕神として、また『続日本後紀』にも記録がある黄金神として、さらには修驗の山として多義的な重要性を持つ。山に伝わる悪鬼・鬼人退治の伝承は、「蝦夷経営の要地」「金産地帯」「修驗の山」の3要素に分類できる。

【都都古和氣神社と建鉢山】

都都古和氣神社（八幡・馬場の二社）は久慈川沿いの交通路にあり、古くから律令国家に重要視されていた可能性が高い。

その原型は、両街道の合流点付近に存在する古代祭祀遺跡・建鉢山に求めることができる。

建鉾山は5世紀頃の祭祀遺跡であり、祭祀形態が畿内・西日本と同様であることから、大和王権の「東国進出・東夷征伐の祭祀拠点」であったと推察される。この推論が、八溝山の「関東と奥州の境界」としての存在感を裏付ける。

【結論】

八溝山を中心として、東西の河川沿い（双頭の軸）に、軍事（白河関）と祭祀（都都古和氣神社、建鉾山）の重要な拠点が配置されており、これらが「関東と奥州の境界」の研究の足掛かりとなる「祭祀・史跡群」を形成している。

本論文は、八溝山周辺の境界的要素の列挙に留まるものであり、今後は「境の明神」の問題、「都都古和氣と八溝山修験」の問題、「ちかつ」の神格についての問題、那須国造の問題など、各論的な深掘りが必要であると結んでいる。

1. はじめに

関東と奥州の境界について考察してみたい。

本論の中核をなすのは、福島・栃木・茨城の三県境の交点に位置する八溝山である。地形的な制約から、関東から奥州へと至る内陸部の街道は、必然的に八溝山の両脇を通過することになる。したがって、境界的要素を含んだ神社・史跡も、自然と八溝山塊とその周囲に集積することになる。

さしづめ八溝山は、関東と奥州の境界の「象徴」といった様相を呈しているのである。

関東と奥州の境界に視点を向けている先学は多いとは言えず、管見に触れた限りでは岩田孝三氏の『関址と藩界』、そして金谷兼男氏の『八溝山塊周辺の境界神考』のわずか二例を数えるのみである。

岩田孝三氏の『関址と藩界』は不破・鈴鹿・愛発・逢坂などのいわゆる古関に必ず祀られていたとされる関明神という要素に注目し、とりわけ関東と奥州の境界に関しては、白河関と境の明神との関係についての重要な一家言を提示している。

後者、金谷兼男氏の『八溝山塊周辺の境界神考』は、岩田孝三氏が取り纏めた関明神や境の明神の要素を踏まえ、さらに前述した八溝山塊の地形的な視点を取り入れ、初めて関東と奥州の境界を意図的に捉えようと試みている貴重な先学である。

実のところ、私が関東と奥州の境界としての八溝山に注目するようになったのは金谷氏の論説を目にする前であったのであるが、これは言うなれば、この地を考察してゆけば必然的に辿り着かざるを得ない視点であったのに違いない。

本論では両先学を参考にしつつ、さらに新たなる要素を補いながら、八溝山塊とその周囲に集積する境界的要素を洗い出し、「関東と奥州の境界」の研究の足掛かりと成したいと考える。

新たなる要素とは、まず八溝山そのものへの信仰の問題であり、次に延喜式内社・大明神の都都古和氣神社、乃至は近津神社の問題であり、さらには八溝山の両脇を通過する二つの街道の合流点付近に存在する古代祭祀遺跡・建鉢山の問題である。

2. 関東と奥州の境界

大和王権を基本として畿内を中心に形成されていった第一次的な古代国家は、西日本を中心とした勢力群であり、その当時の東日本や北日本は、国家の支配が及ばぬ蝦夷（エミシ）の国であったと捉えることができる（一）。

この蝦夷の抵抗を取り除き、統一国家の枠組みの中に取り込んでいこうとする働きが蝦夷経営であり、その端緒が日本武尊の東征に象徴される東国経営であった。

東国、即ち現在の関東地方が国家の支配下に入ると、以北の地理的な遠隔、また風土環境の厳しさから、蝦夷経営は困難を極めることになる。東北地方全域を「みち（陸）のおく（奥）の国」＝陸奥国と呼称したことからも、それを推測することが可能であろう。

その後の陸奥国は中央国家の支配を受け入れながらも、俘囚の長の乱である前九年・後三年の役（二）などに見られるように、断続的に抗争を繰り広げ、ついには一二世紀後半に源頼朝によって奥州藤原氏が滅亡するまで、その独特的文化圏を維持することになったのである。

蝦夷経営の始まりは、記紀・先代旧事本紀に見られる国造制の出現から奈良時代だと考えられる。『先代旧事本紀』に因れば、白河は奥州で最も早期に国造が置かれた土地であることが確認され、蝦夷経営の起点・基点として、奥州の入り口に白河関が設けられたのは、八三五年の太政官符（三）に「剣を置きて以来、今に四百余歳」とあるように、可能性としては五世紀頃にまで遡ることができる。

つまり、中央国家と蝦夷との対立という俯瞰的な構図で捉えようと試みるのならば、時代によって争う勢力、そして奥州の内でも争う土地を転々とはしながらも、この抗争は実に、最大で八世紀もの長きに渡ると考えることができる（四）。

このような歴史の中で見れば、関東と奥州の関係は、単に隣接する二つの地域という概念を超えて、とりわけ特殊な位置にあると考えることができるだろう。

3. 八溝山という視点

現在においては、一都六県を関東地方、福島県以北を東北地方と呼ぶように、栃木県・茨城県と福島県の県境付近が、多少の国界変遷の可能性はあるにしても、古来よりの関東と奥州を分かつ境界（五）である。

この福島・栃木・茨城の三県境が交錯する付近には八溝山が聳えている。標高は1022mで、茨城県の最高峰である。山頂部は福島県と茨城県の県境になっており、北西に1km弱の場所には、さらに栃木県の県境が接している。

関東から奥州へ至る道筋は、大きく二つが知られている。一つは先ほども述べたとおり、奥州で最も早期に国造が置かれたとされる白河地方から奥州へ至るルートで、那珂川沿いに発達した街道を進み、入り口には白河関が置かれる。

もう一つは太平洋岸沿いを進み、いわき地方へと至るルートで、入り口には勿来関が置かれる。

この白河関と勿来関、そして山形県の念珠関を含めて奥州三古関と称することから、関東から奥州へと至るルートは白河と勿来の二力所が特に有名である。

しかし内陸側の入り口である白河と、海側の入り口である勿来とは、東西に五〇キロ程度は離れており、その中間に街道がまったく存在しないわけではない。

白河地方の白河関を入り口とするルートは、地勢的に見ると、東の阿武隈山地（六）の一端である八溝山と、西の高原山・男鹿山・那須連峰（七）とに挟まれており、西の那須方面からの流れを一手に集める那珂川に沿って発達した旧陸羽街道を主に進むルートである。

一方で八溝山は分水嶺になっており、八溝山中の県境（それはつまり尾根なのであろうが）を境に、栃木県側の河川は那珂川に、福島県と茨城県側の河川は久慈川に注いでいる

(八)。この八溝山の東側、久慈川に沿った久慈街道、さらに久慈川の支流である里川に沿った茨城街道が、白河関と勿来関の中間に位置する、第三のルートである。

これで関東から奥州へ至る三つのルートが出揃った。すなわち、浜通りの勿来関ルート、那珂川沿いの白河関（那珂川）ルート、そして両者の中間に位置する久慈川ルートである。

この中で特に、八溝山を中心として、その東西を流れる久慈川と那珂川の両河川沿いに発達した街道筋に焦点を当て、関東と奥州の境界についての考察を試みてみたい。

両街道沿いには注目すべき神社・史跡が散在する。久慈川沿いには大塙関・近津神社・都古和氣神社などがあり、那珂川沿いには白河関・境の明神・追分の明神などがある。しかも両街道は八溝山の北側で合流し、その付近には考古学調査によって古代祭祀遺跡であることが裏づけられている建鉢山が存在するのである。

本論ではこれらを意図的に捉え直し、「八溝山周辺に形成された関東と奥州の境界としての祭祀・史跡群」という視点を与えてみたいと思う。

4. 八溝山周辺の地勢と街道

陸奥国の支配が遅れた理由として、地理的な遠隔と風土環境の厳しさという要素を第二節に挙げたが、これは単に畿内からの物理的な距離が遠く、気候が厳寒であるというだけの事ではない。日本という国は周知のとおりその大勢が山岳地帯によって占められており、平野はあっても狭く、また河川は短くて急である。

つまり陸上にしても河川にしても、有効な交通路の確保は甚だ困難なのである。これは当然ながら東北地方も例外ではなく、この交通的僻地という要素が、厳しい地理・環境と相俟つて、蝦夷経営に付帯する軍事・輸送に大きな影響を与えたものと考えられる。

現代でこそ、谷には橋を架け、山には隧道を穿つことも可能であるが、蝦夷経営が行われていた奈良・平安・鎌倉時代の土木技術ではそうもいかない。当時は恐らく道は造るものではなく、地形を選んで通行の容易なところが自然と街道として成り立っていったのだろう。

先ほど取り上げた奥州への三つのルートは、まさにこれを裏づける例となる。平地低地が惜しげもなく続き、見通しが利いて道を選びやすいのは、まず砂浜の海岸線であり、第一に勿来関を閑門とする浜通りが街道として注目されたのは、これは尤もなことであっただろう。

そして内陸部では、水の流れが切り開いた渓谷、河川に沿った低地をゆくのが常套であり、山があれば山麓の周囲を迂回し、止むを得ず山越えをしなければならない場合には、努めて鞍部を選んだのに違いない（九）。

本論の主題である八溝山周辺を見れば、たとえば白河関を閥門とする旧陸羽街道は那珂川沿いに想定されており、那須町以北の山間部では、那珂川支流の余笠川・奈良川・三蔵川、さらには阿武隈川水系の社川に沿い、これは八溝山の西側山麓部をなめるように通っている。

一方の八溝山の東側山麓部では、八溝山よりさらに東の阿武隈山塊とに挟まれて、久慈街道と茨城街道が、それぞれ久慈川と、久慈川の支流である里川に沿って展開している。

なお、八溝山周辺の地勢と、以降で紹介する神社遺跡群の位置関係については、Google マップで作成したオリジナルマップを参考にしていただきたい。

https://www.google.com/maps/d/edit?mid=17RdIFLIK3J36G5p6fy-mP_MC1wqzk2U&usp=sharing

5. 八溝山の信仰

各要素の考察は、やはり中心となる八溝山から始めたい。八溝山という視点が肝要であるということは前述のとおりであるが、八溝山そのものも数々の視点から信仰の対象となっており、これを看過することはできない。

八溝山の山頂には、延喜式内社である八溝嶺神社が鎮座しており、大己貴命と事代主命を祀っている。

藤田定興氏の『八溝山信仰と近津修験』（十）に因れば、この八溝（嶺）神社は八溝山とその麓の郷村四四六ヶ村の総鎮守的存在であり、祭礼日には常陸・下野・陸奥の各村から村人がこぞって登拝をしたという。

八溝山は久慈川や那珂川支流の水源となっている（十一）ことから自然と農耕神的性を帯び、八溝神社は作神様であるとして、各地区からボンデンを担ぎ上げることで豊饒を祈り、お参りの人は持ち帰ったお札を田の中に立てたそうである。

また霜月の秋祭りでは種子を入れた藁のツツコの奉納が行われ、同時に他の人の奉納したツツコを持って帰ったということである。

農耕神として信仰される一方で、白河古事考（十二）の八溝嶺神社の項目には「始めにも載せし黄金神也、黄金を始て世に出て人を恵みし神ならん」とあり、また『式内社調査報告』（十三）に記載の『神名帳注釈』には「八溝嶺神社、金山彦命」「山中多金穴、古掘黄金所也」「山頂有神祠、蓋所謂黄金神也」とあるように、どちらも八溝山に祀られているのは黄金神であるとしている。

『続日本後紀』の承和3年（841年）正月二十五日の項に「詔奉充陸奥國白河郡從五位下勲十等八溝黄金神封戸二烟、以應國司之禱、令採得砂金、其敷倍常助遣唐之資也」とあり、つまり国司が八溝山の神に祈りを奉げれば金が採れる敷地が広がり、それが遣唐使の資金となつたと記されているのである。

また東京学芸大学名誉教授の岩田孝三氏は、八溝山麓東南部の低地にあった依上保（大子町付近とされる）での金坑の存在を指摘しており（十四）、八溝山とその周辺が古来より金産地帯として注目されていたであろうことを推測させる。

また、八溝山には悪鬼もしくは鬼人が住んでいたという伝承があり、これを退治する説話が数々の文書に記されている（十五）。

藤田定興氏はこれらの説話に共通する要素として、第一に悪鬼・鬼人が蛇体であること、第二に悪鬼・鬼人を退治するのが那須国造、那須氏の祖（藤の権守）、日本武尊等の著名な武人か、弘法大師、伝教大師等の高僧であること、そして第三に退治には地主神が現れて助力をしていることなどを挙げている。

また蛇体とは明記されていないが、八槻都都古和氣神社の伝承（十六）では日本武尊と八溝山の東夷の戦いが、八溝川に沿った近津神社・下野宮の伝承（十七）では藤原富得と八溝山の悪鬼の戦いが伝えられている。

同じ八溝山に伝わる伝承でありながら、このように退治する者とされる者が食い違い、しかも退治する者にはまるで共通性が無いところなどを見ると、これは八溝山の重要性の一義的ではないところを窺わせる。

即ち、これら悪鬼・鬼人退治の伝承は、大まかに三種に分類できるように思われる。

第一に挙げられるのは「日本武尊と東夷の戦い」等の要素から、本論の中心である関東と奥州の境界、蝦夷経営の要地としての八溝山に纏わる伝承である。

第二には、悪鬼・鬼人が蛇体であるということ、そして八溝の神は黄金神として崇められてきたという事実から、八溝山とその周辺の金産地帯に纏わる伝承（十八）である。

そして第三に、悪鬼・鬼人を退治した者として弘法大師・伝教大師等の高僧が登場することから、修験の山としての八溝山に纏わる伝承である。

修験道という要素に関しては、先ほども紹介した藤田定興氏『八溝山信仰と近津修験』に詳しい。頂上の八溝嶺神社より直線距離で1kmほど下ったところに日輪寺という寺があり、板東三十三観音霊場の第二十一番札所（十九）に数えられている。奈良時代の開山という伝承（二十）はともかくとして、現存する十一面觀音台座裏銘から、鎌倉時代初期には既に觀音堂と本尊があったことが推測される。また注目すべき要素としては、八溝修験は、第十節にて取り上げる八槻都都古和氣神社の、その別当・大善院の配下であったということが挙げられる。

6. 那珂川と旧陸羽街道

八溝山の東西を流れる、双頭の軸の一方は那珂川である。

那珂川は那須連峰の一部である茶臼岳の雪融け水を水源とし、八溝山の西方、栃木県内を流れる余笠川・簗川・荒川などの各支流の流れを集め、大きく南東方向の茨城県へと流れ下ると、水戸市内では那珂台地と上市台地の間を抜け、河口近くで個沼川と合流して、ひたちなか市で太平洋へと注いでいる。

幹川流路延長150キロメートル、流域面積3,270平方キロメートルの一級河川である。

那珂川の生み出す肥沃な大地は、古来より人々の生活を潤してきたと考えられ、その証拠に流域には多くの古墳や遺跡が散在している（二十一）。

その中でも栃木県湯津上村の侍塚古墳と那須国造碑、そして同・小川町の那須官衙遺跡の問題は、単に那須地方という局地に留まらず、奈良・平安期の時代考察に重要な視点をもたらしている。

或いはこの那須国造碑の問題などは、地形的には関東平野の北端である那珂川中流域、そして行政区分的には関東の北端であった那須郡ということを考え合わせれば、関東と奥州の境界考になんらかの示唆を与えることも充分に考えられるが、ここでは私の研究不足のこともあります、その可能性を挙げるに留めておくこととしたい（二十二）。

那珂川沿いを通るのは旧陸羽街道（二十三）であり、これは栃木県から福島県へ、旧国名で言えば下野と陸奥の国界を越えるルートである。

旧陸羽街道は那須町付近から那珂川本流を離れ、支流の余笠川沿いを進み、さらにその先で奈良川沿いと三蔵川沿いの二通りのルートを選ぶことになる。前者は栃木県寄居から福島県白坂へ抜けることから白坂道と呼ばれ、徳川時代に入って主要路とされた官道であり、旧陸羽街道と言えばこちらのことを指す。後者は白坂道が発展する以前の古い時代の主要路であったとされ、白河関を経由することから関街道、もしくは白河関周辺の地名をとって旗宿道と呼ばれる（二十四）。

7. 白河関

白坂道と旗宿道のどちらを抜けても、共に白河の地へと至る。陸奥国の最南部であるこの返事が古来より重要視されてきたのは言うまでもなく、白河郡と言えば近隣と比べても大郡であり（二十五）、また蝦夷経営の拠点として奥州で最も早期に国造が置かれた土地であった。

江戸時代に入っても幕府は東北の抑えとして白河に譜代大名を配置し、特に名君として名高い松平定信の統治時代（二十六）などは有名である。

蝦夷経営の始まった奈良・平安時代ということを考えると、やはり白河関を看過することはできまい。おそらく関東と奥州の境界として最も著名であろうこの古関は、太政官符の記述から、その創始は五世紀頃にまで遡ることができる。

現在において白河関と認定されているのは白河市大字旗宿字関ノ森の関跡であり、これは前述の松平定信が考証し推定した場所であるが、昭和三十四年から三十八年の発掘調査によつて奈良・平安期の土器や鉄器、柵列・門跡と考えられる柱穴が出土し、昭和四十一年には国の史跡として指定されている。

白河関跡周辺の地勢を概括してみたい。前節にて述べたとおり、旗宿道は那珂川水系の三蔵川沿いを遡上するのであるが、これは国界を越えたところで、今度は阿武隈川水系の社川と共に下ってゆくことになる。

つまりこの国界は分水界ともなっているわけであり、名実共に関東と奥州を分け隔てていると言えるだろう。

さらにこの国界の栃木県側には追分の明神（白河古事考では野ノ國界關東明神と記載）と呼ばれる「境の神」が祀られている。寛永五年に書かれた『境神社舊記』（二十七）によれ

ば、坂上田村麻呂による勧請を創始とし、御鎮座は延暦年中というからこれは八世紀後半である。

『那須郡誌』（二十八）によれば正式名称は住吉玉津島神社、祭神は中筒男命と衣通姫命の男女二神である。この男女二神の要素をもって、奈良・平安時代よりの伝統的な境界神の体裁を成しているとも伝わる。

国界付近は三蔵川や社川の水源にほど近く、これは川と言うよりは沢と言った方が相応しい規模である。すぐ東には八溝山塊北端の尾根の一部が迫り、標高こそさほど高くはないものの、土地は開けておらず、基本的には奥深い山中である。



白河関跡はその国界から二キロほど北にあり、この場所は軍事拠点として真に秀逸であると言えるだろう。上の写真（二十九）は白河関跡現地にある看板で、栃木県側（写真手前側）から福島県方向へという視点で白河関跡を空撮したものであるが、これを見れば明らかに、東西を丘陵に囲まれながら、社川とその支流が作り出したと思われる見晴らしの利く狭平野があり、そのただ中に周囲を睥睨するかの如くに白河関跡が盤踞している。

岩田孝三氏などは「陸奥国への備えとして考えるのならば、この白河関跡の配置はおかしい」という主張（三十）もしてはいるが、考古学的調査の結果や各文献等の記述などを鑑み

るのならば、他の場所に有力な代替地の想定も難しく、現状ではこの旗宿の地を白河関であると考えることが最も据わりが良いということになるだろう。

白河関跡内には白河神社が鎮座している。『式内社調査報告』に所載の白河神社に伝わる伝承によると、創始は成務天皇五年九月に白河国造・鹽伊乃自直命を祀ったことに始まり、宝亀2年（771年）3月9日に天太玉命、そして中筒男命と衣通姫命を祀ったという。

現在は社殿が一つしかないが、『白河風土記』（三十一）には中筒男命を祀る住吉明神社と衣通姫命を祀る玉津島社は別の神社として記載されている。

このうち、住吉明神社が現在の白河神社に相当すると思われる。理由は、従二位の杉や矢立の松などの白河関跡内の史跡が、住吉明神社の社地にあるものとして記されているからである。『西白河郡誌』（三十二）によれば、南方数町にあった玉津島神を明治初年に合祀したとの記載があり、やはりそれまでは別々の神社だったのだと思われる。

8. 境の明神

一方の白坂道（旧陸羽街道）であるが、こちらの国界には「境の明神」と呼ばれる興味深い境界神が祀られている。境の明神は、現在の国道294号線の道路に面して、栃木県と福島県の、正に県境に位置する神社なのであるが、極めて特徴的であるのは、県境を挟んで数メートルの距離に、二つの神社が並び座している形になっているということである。つまりその二社を併せての「境の明神」という俗称なのである。

これは神社前の看板によれば、奈良・平安時代の風習に従い、国境の手前に女神である玉津島神、国境の奥に男神である住吉神を祀り、境界の守り神としたものであるという。つまり道祖神に見られるように、村界や辻には男女、もしくは性的なシンボルを置いて守り神とするという考え方に基づいているようである。

特に東京学芸大学名誉教授の岩田孝三氏はこの点に注目し、境の明神の男女二神対向の祭祀形式が、「不破・鈴鹿・愛発・逢坂」などの古関に必ず祀られていたとされる「関明神」の体裁に合致することから、境の明神こそ白河関のあった場所ではないかという推論を展開し、福島県側境の明神の向かいに二所ノ関立証（三十三）を記念した石碑を建立している。

しかしこの岩田孝三氏の論説は、傾聴に値する重要な視点を含んではいるけども、飽く迄も一つの説であるという姿勢で聞くべきであろう。たとえば男女二神ということにしても、境の明神は栃木県側・福島県側共に、明確に玉津島神社であること（つまり住吉神の勧請の記

録は見つけられない）、また伝承に従えば両社の創建には二六四年間の隔たりがあり、これを男女対向の関明神だと考えると少々おかしなことになってしまうことなど、いくつか説明の難しい矛盾が出てきてしまうからである。

ところで、この境の明神や追分の明神、そして白河関跡の白河神社のように、住吉神と玉津島神をもって境界神、或いは関明神とするという事例は、恐らく関東と奥州の境界付近独特のものであり、大いに注目されることである。

9. 久慈川と久慈街道・茨城街道

双頭の軸のもう一方は、八溝山の東側を流れる久慈川である。久慈川は、八溝山の頂上付近・北側の斜面に端を発する川で、山間部を北東方向へと流れ下ると、麓の棚倉からは南流を開始し、八溝山の東側、即ち八溝山塊と阿武隈山塊の中間を通過し、茨城県の平野部に入ると里川などの各支流の流れを集め、日立市久慈町の南方で太平洋へと注いでいる。

幹川流路延長124km、流域面積1,490km²の一級河川である。

この八溝山の東側では、大きく二つの街道が想定される。即ち、久慈川本流に沿った久慈街道（現在の国道118号線）と、久慈川の支流である里川に沿った茨城街道（現在の国道349号線）である。

那珂川沿いが野・奥の国界であったのに対し、久慈川沿いは常・奥の国界であり、つまり茨城県と福島県の県境が大凡これに該当する。八溝山塊は厳密には阿武隈山地に含まれることから、久慈川を初めとする一部河川がこれを削る以外は、なだらかな丘陵部がほとんど切れ目無く続いている、交通路は必然的に河川沿いを選ぶこととなる。

現在ではJR水郡線がほぼ久慈川本流に沿う形で通っているが、鉄道を敷くにあたって、やはり同じようなところに着目したものと思われる。

久慈街道と茨城街道には、それぞれ焼山関と大塙関が設置されていたということが文献（三十四）に見られる。焼山関は大子町付近であるということしか推定ができないが、第五節にて触れた金坑のあったとされる依上保の場所と重ねて想定することも可能であり、また西の栃木県馬頭町との県境は境の明神峠と呼ばれ、『白河古事考』にいう依上の境の明神（三十五）が祀られている。

大塙関は、こちらも明確な場所は不明であるものの、福島県矢祭町には大塙という地名が残っており、県境付近は明神峠と呼ばれ、住吉神と玉津島神をもって大塙の境の明神（三十五）が祀られている。

六）としている。この焼山関と大塙関は、白河関と勿来関の中間関としての役割を果たしていたものと思われる。

10. 都都古和氣神社

延喜式神名帳記載の白河郡七座に大明神・都都古和氣神社の名が見える。

現在、都都古和氣神社は二社有り、一つは白川郡棚倉町大字八槻字大宮、もう一つは棚倉町大字棚倉字馬場に在る。地名をとって前者を八槻都都古和氣、後者を馬場都都古和氣と呼ぶ。なぜ二社あるのかは明確でないが、共に創始は日本武尊と建鉢山の伝承に由来している。

八槻都都古和氣神社の祭神は味耜高彦根命で、日本武尊を配祀している。『白河古事考』や『式内社調査報告』によると別当は大善院であり、これは第五節で述べたとおり八溝修驗の主格的存在だったとされている。

縁起については数種の文献が存在し、各々で食い違う部分もあるため一概には言えないものであるが、たとえば『白河古事考』記載の『大善院縁起』には「日本武尊爲東夷征伐下向し給ひ、八溝山の戦場へ出現し加勢の三神、面足尊・惶根尊・事勝國勝長狹命也ける、日本武尊之を勧請し給ぬ、地主は味耜高彦根命也、後世より日本武尊をも添て祭る」とある。

『式内社調査報告』に記載の福島県立図書館所蔵『八槻神社所傳縁起』では、面足尊・惶根尊・事勝國勝長狹命の三神に助けられることまでは同じだが、出現した三神は「大己貴神平國時」に味耜高彦根命が持っていた「平國鉢」を受けたとし、その鉢を「三神一所御鉢立置不見」、その場所が今の「鉢立山」（建鉢山）であるという。

そして日本武尊は東に向かって矢を放ち、矢の到達した場所、すなわち八槻の地に社殿を建てることになった。

馬場都都古和氣神社の祭神は味耜高彦根命で、日本武尊を配祀。さらに前述の伝承で日本武尊を助けた面足尊・惶根尊・事勝國勝長狹命の三神と、大己貴命・少彦名命・事代主命を合祀している。別当は『白河古事考』『式内社調査報告』により不動院である。

縁起については『式内社調査報告』に文禄3年（1594年）初春の書簡と伝わる『馬場都々古別神社縁起』が記載されているが、ここでは神社前看板記載の御由緒が簡明であるので、これを引用したい。

馬場都々古別神社 看板記載の御由緒 一部抜粋

延喜式に陸奥国白河郡名神大座都々古和氣神社とある御社で、凡そ千八百五十余年前景行天皇の御代日本武尊東奥鎮撫の折、関東奥羽の味耜高彦根命地主神として都々古山現西白河郡三森村の岩山に鉢を建て御親祭せられたのが創始である。平城天皇大同二年坂上田村麻呂野莊現棚倉城跡に奉遷社殿奉殿し日本武尊を相殿に配祀奉る
寛永元年丹羽五郎左衛長重幕命により棚倉築城に際し現馬場に景勝の替地を奉り社領を添加し社殿解体移築同二年遷宮し奉る

細かい点では揺らぎこそあるものの、両社の縁起には一定の共通点が見られる。日本武尊が八溝山の敵と戦っていること、それを地主神である味耜高彦根命、又は面足尊・煌根尊・事勝國勝長狹命の助力を得て打ち破っていること、さらに勝利した日本武尊が鉢を立てた場所、鉢立山が都々古和氣の原型となったと示唆していることなどである。

この八楓・馬場都々古和氣神社の鎮座している場所は、古今を通じて国界であったという話も聞かず、また境の明神のように男女二神をもって境界神としているというわけでもなく、一見すると関東と奥州の境界考にはなんら関係がないようにも思われるが、私は次の理由からあえて都々古和氣を関東の奥州の境界として捉えてみたいと思う。

一つは都々古和氣が関東から奥州への交通路であるところの久慈川に沿って鎮座している大社であるということである。

都々古和氣は延喜式内社・白河郡七座の内の明神であり、さらに名神大、奥州一宮、國幣中社としても位置づけられ、これが律令国家によって重要視されていた可能性は高いように思われる。

しかもそれが広大な陸奥国の、ほんの入り口付近に置かれている（三十七）ということを考え併せるのであれば、関東と奥州の境界の、軍事上の重要拠点が白河関であったであろうことに対応して、祭祀上の重要拠点は都々古和氣ではなかったかと考えることも許されるのではないかだろうか（三十八）。

たとえば坂上田村麻呂が馬場都々古和氣を馬場へ奉遷したのは、日本武尊の故事に倣い、味耜高彦根命と日本武尊の御加護にあやかろうと考えたからではないか。つまり征夷の戦勝祈願を行うに際して、都々古和氣を祭祀拠点としたのではないかと推測することもできるだろう。

二つには鎮座地が、八楓は久慈川と近津川の合流点付近であること、また馬場は久慈川と阿武隈水系の社川の中間付近であることである。

前者については次節にて詳しく取り上げるが、八溝山に端を発する久慈川の支流と久慈川との合流点付近には、細流の場合こそ確認できていないものの、大抵は神社が鎮座しており、これらを纏めて捉えると関東と奥州の境界の象徴的存在である八溝山をほぼ等距離に取り巻く祭祀群を見なすことができる。さらにこれは些末な事かもしれないが、ここは平安末期以降の白河荘と高野郡の領界付近でもあった。

後者については、白河関や追分の明神等の境界的要素が那珂川水系と阿武隈川水系の分水界付近に在ったことを考えれば、この辺りは国界ではないものの、久慈川水系と阿武隈川水系の分水界付近に鎮座しているという要素も考察に値するはずである。

三つには、本論の核となっている八溝山、そして終着点ともいえる建鉢山との関連が色濃いことである。

たとえば、「5. 八溝山の信仰」にて紹介した八溝嶺神社のツツコ奉納の祭事と同じものが、実は都都古和氣神社でも行われており（三十九）、この『ツツコを分かつ』の意が『都都古和氣』の珍しい名の由来であるとする解釈も可能なのである（四十）。

また前述したとおり、都都古和氣の伝承は、祭神である味耜高彦根命が最初に祀られたという建鉢山の存在を指し示している。

たとえば『白河古事考』では、都都古和氣の元になった社を「三森村の山都都古和氣社」としているのであるが、三森村とは現在でも建鉢山周辺の地名となっている。

そして建鉢山は、五世紀初頭から終わりにかけての古代祭祀場であったことが考古学調査によって裏づけられており、ならば建鉢山を中心とするなんらかの信仰が存在し、それが都都古和氣の原型となったのであろうと推測される。

11. 「ちかつ」についての一考察

八溝山に端を発する八溝川に沿って、三つの近津神社が鎮座しており、これを近津三社と通称する。八溝山に近い上流から順に上野宮・中宮・下野宮であり、下野宮のある場所は久慈川との合流点付近となる。

この中で特に下野宮は重要で、なぜならば近津三社には別の見方があり、馬場都都古和氣神社を上宮、八槻都都古和氣神社を中宮、そして近津神社下野宮を下宮とする場合があるからである。

前節では混乱を避けるために強調はしなかったのであるが、都都古和氣神社が近津大明神と呼称されていたことは文献にも記されている（四十一）。

前節で紹介したとおり、馬場は久慈川水系と阿武隈川水系の分水界付近に、八槻は久慈川と近津川の合流点付近に、そして下野宮は久慈川と八溝川の合流点付近に鎮座している。

地図上にて確認すれば、地勢の影響もあって、これらが久慈川に沿って八溝山からほとんど等距離に在ることが確認できるはずである。

この近津（ちかつ）の名称の由来は諸説ある。いくつか紹介すると、まず『平成祭データ』の「日本武尊強夷征伐の時千度戦って千度うち勝ってがいせんされた御神徳をたたえ、その御神威に感動した八幡太郎義家が奥州征伐の時千勝大明神と改められたのもまことに故あることである。」という記述に因る、千回勝つで千勝説。

また『馬場都々古別神社縁起』の「近津者事勝也」という記述から、事勝國勝長狭命に由来するという説。

そして『八槻神社所伝縁起』の「然本社三神嶽跡在筑前志賀島、奉号近津大明神、任此例有勅命、社号改近津大明神、是上天御中主命下天照大神近親故也」という記述から、天孫の近親、つまり「近つ神」であるとする説、などである。

ところで、関東と奥州の境界の象徴とも言うべき八溝山に縁の深い「ちかつ」であるから、何か境界的な要素を有していないものかと考えていたところ、ある一つの可能性を見出すことができたので、それに言及しておきたい。

茨城県つくば市泊崎に千勝神社という神社がある。源義家が都都古和氣を千勝大明神と改称したとの前述の伝承があり、ならばこの千勝神社も近津神社と何か関係があるのでないかと考えることが筋道であると思う。全くの偶然ながら、社家である千勝家の千勝満彦氏とは國學院大學の同窓であり、正に縁あって話を聞くことができた。

しかし予想に反して、表面上は近津神社との関係を見て取ることは困難であった。

近津神社の祭神は級長津彦命・面足命・惶根命、都都古和氣神社の祭神は前節にて記したとおりであるが、千勝神社の祭神は千勝大神（猿田彦大神）である。

また都都古和氣の伝承では大きな割合を占めていた建鉾山と日本武尊の伝承が千勝神社には伝わっていない。

それどころか都都古和氣を千勝大明神と改称した源義家との関連に至っても不明であるというのである。

千勝満彦氏の結論としては「少なくとも現在は、千勝神社として近津神社との関連を意識してはいない」とのことであった。

しかし考察に値する要素が無いわけではない。一つは千勝神社の祭神である猿田彦命であるが、実は八溝領神社の伝承に登場するのである（四十二）。

そしてもう一つは、こちらの方がより重要なのであるが、千勝大神が当初は常陸と下総の「国境」に鎮座された神であったということである（四十三）。

しかも後に奉斎された場所は坂井（さかい）という地であり、猿田彦命が一般的には村界や辻などの守り神である「岐神」や「道祖神」と同一視されることを考え併せれば、千勝大神は交通の要衝に鎮座する境界神としての要素を有していると見なすこともできよう（四十四）。

「4. 八溝山周辺の地勢と街道」にて、古代の交通路は河川沿いに選ばれたであろうという考察を展開した。ならば都都古和氣や近津下野宮が鎮座している分水界や河川の合流点は、Y字路やT字路、もしくはもっと複雑な形の、街道の交差点であると捉えることができる。

ではそれがどこへの分かれ道なのかと言えば、常陸・下野・陸奥の郷村四四六ヶ村の総鎮守的存在であった八溝山へと続く道なのである。やや観念論的であるくらいは否めないものの、これを以て「ちかつ」の神が猿田彦大神と同様に「要衝に鎮座する境界神」としての要素を有していると考えることはできないだろうか。

12. 古代祭祀遺跡・建鉾山

いよいよ双頭の軸は交錯し、那珂川と久慈川に沿った二つの街道は八溝山の北に収斂することとなる。ここに存在するのは、発掘調査によって考古学的に祭祀遺跡であると裏づけられている建鉾山である。

「10. 都都古和氣神社」にて紹介したとおり、日本武尊が建鉾山へ鉾を立てた（或いは味耜高彦根命を祀った）という伝承、馬場都都古和氣は建鉾山から奉遷したものであるという

伝承、都都古和氣の元になったのは「三森村の山都都古和氣社」であるという『白河古事考』の記述等から、都都古和氣神社の原型は建鉢山に求めることができる。

では都都古和氣の原型となった建鉢山の信仰とは、一体どのようなものであったのだろうか。建鉢山の祭祀遺跡としての意味、或いは歴史的意義といったものが、そのまま都都古和氣神社の重要性に、さらには双頭の軸の交点にあるという地理的要件からして、八溝山を中心と捉えた関東と奥州の境界の重要性に、それぞれ直結してゆくことだろう。

建鉢山に関する研究は戸田有二編『古代祭祀建鉢山遺跡』（四十五）に集約されているようであるので、以降は本書を参考にして進める。

建鉢山は五世紀初頭から終わりにかけての古代祭祀場であった。そして発掘調査の結果からすると、その祭祀形態は畿内・西日本と同様のものであるという。これが意味するのは、畿内を中心に形成されていたはずの大和王権の勢力が、既に五世紀初頭には建鉢山のあるこの地に及んでいたということである。

建鉢山が祭祀場として選ばれた理由は山の形が三方から見たときに神奈備型をしているからだと考えられる。そして建鉢山がある地名の「三森」は「御諸・御室」が転訛したものではないかという大場磐雄氏の指摘がある。

御諸山とはつまり、大和国の大和國の象徴的な神奈備である三輪山に他ならない。

さらに東国経営を担った上毛野氏は豊城入彦命の子「御諸別王」の一族であることから、御諸山（三輪山）の大物主命を奉じていた一族であると考えられる（四十六）。

本書ではこれらを総合して、三森の建鉢山は元来「御諸山」と呼ばれ、神体山として大物主命を祀っていたのだろうという結論を導き出している。

また建鉢山の祭祀場は、大和王権の東国進出に伴い、さらに北方に進出するための軍事や外交の祈願を行う祭祀拠点として、大和王権によって国家神として設置され、そして祭祀が行われていたのだろうと推察している。

また建鉢山と都都古和氣との関連については、都都古和氣の伝承が東夷征伐を前提としていることから、都都古和氣の神が「古い時代から蝦夷政策に关心を持っていた神と考えられる」とし、その都都古和氣の原型となった建鉢山が東国進出の祭祀拠点であったという論を補強しようとしている。

しかしながらこれは、都都古和氣社の祭神である味耜高彦根命を軽視した論説となつてはいないだろうか。「10. 都都古和氣神社」にて引用した『大善院縁起』や馬場の御由緒には、味耜高彦根命は地主神であったと明記されている。

馬場の伝承に従えば日本武尊によって建鉢山に鎮座した味耜高彦根命は、坂上田村麻呂が庄野荘に奉遷する8世紀の終わりから9世紀初頭辺りまでは建鉢山に祀られていたことになるわけで、5世紀頃の建鉢山に大物主命が祀られていたとするのはやや唐突なように思う。

味耜高彦根命と大物主命には幾つかの共通点は見られるものの（四十七）、少なくとも大物主命が都都古和氣に通じると考えるには、味耜高彦根命の問題に何らかの説明を用意する必要があるだろう。

この疑問はともかくとしても、発掘された祭祀遺跡が畿内・西日本と同じ様式であったという要素は決定的な意味を持つわけであり、そこから導き出される「建鉢山が大和王権にとつての東国進出・東夷征伐の祭祀拠点であった」という考古学的推論は非常に重要なものとなる。

この説明があつてこそ「関東と奥州の境界の、軍事上の重要拠点が白河関であったであろうことに対応して、祭祀上の重要拠点は都都古和氣ではなかつたか」という、「10. 都都古和氣神社」での心許ない考察にも多少の説得力が出てくるわけであるし、また当然のことながら、建鉢山の背後に聳える八溝山の「関東と奥州の境界」としての存在感も、一際大きなものになってくると言えるだろう。

13. おわりに

福島・栃木・茨城の三県境の交点に位置する八溝山は、事実上の「関東と奥州の境界」であり、また、その周囲に境界的要素を備えた神社・史跡が散在していることから、概念上も「関東と奥州の境界」を象徴する存在であると見なすことができる。

一方で久慈川や那珂川支流の水源である八溝山は、農耕神として麓の郷村四四六ヶ村の崇敬を集め、或いは産金の伝承を持つ山として、或いは修驗の山として、その形相に恥じぬ重要性を有している。

その中で私が提示した視点は、八溝山の東西両脇の「双頭の軸」である那珂川と久慈川であった。

この二つの河川に沿う街道には、西の那珂川沿いには軍事上の重要拠点である白河関が、東の久慈川沿いには祭祀上の重要拠点と目される都都古和氣神社が、それぞれ大きな存在感を放っている。

そして両街道は八溝山の北側で交錯し、その付近に「大和王権にとっての東国進出・東夷征伐の祭祀拠点であった」と推察される古代祭祀遺跡・建鉢山が存在している。

以上のように、関東と奥州の境界を、八溝山を中心に包括的に捉えようと試みたのであるが、しかしこれは冒頭に述べたとおり、境界的要素の列挙に止まるものである。即ち「関東と奥州の境界の研究」の入り口に過ぎないわけであり、ここを端緒として各論に踏み込んでゆく必要があるだろう。

私は実のところ、当初は境の明神の特徴的な二社並列に興味を持ったわけであり、つまり各論から出発したとも言えるわけなのであるが、これに一定の理解をもたらすには「関東と奥州の境界」という全体論の整理が不可欠であった。

そんな事情もあって全体論を取りまとめる機を得たのであるが、以降は暫く各論に取り組む時間を得たいと思っている。

出発点である「境の明神」の問題は勿論のこと、都都古和氣と八溝山修験の問題、または「ちかつ」という神格についての問題、豊城入彦命を介して建鉢山とも繋がる那須国造の問題など、「関東と奥州の境界」には、興味深い論題が山積している。

(一) 蝦夷についての考察は主に、工藤雅樹氏の『古代蝦夷』（吉川弘文館、二〇〇〇年）を参考にさせてもらった。

(二) 前九年の役は源頼義と安倍氏との戦いであり、後三年の役は源義家と清原氏の戦いである。前九年の役はともかく、後三年の役は中央国家への反乱というよりは清原氏の内紛といった様相を呈するが、源氏は鎮守府将軍や陸奥守として、つまり中央国家の権威をもって陸奥国の紛争に介入している。

(三) 『類聚三代格』任明天皇の承和二年十二月三日の太政官符

(四) 奥州藤原氏は中央国家から鎮守府将軍や陸奥守に任命されていることから、既に蝦夷とは言い難いのかもしれないが、俘囚の長であった安部氏の血を引いていることは事実であり、また独特的平泉文化も陸奥国の辺境と産金による資金力ならではのものであった。よって奥州藤原氏が源頼朝に滅ぼされた1189年を到達点とするのならば、実際に800年近くの長い間を、中央国家と蝦夷（又は陸奥国）との紛争が続いたと見なすこともできるだろう。

(五) 国界の変遷について。たとえば現在において白河関跡であるとされている場所は国界ではないが、関跡内の白河神社に奈良平安期の境界標識だったとされる男女二神が祀られていることや、後に歌に詠われる白河関が、正にそれを越えれば奥州へ至るという感覚を有していることから、そこが元は国界ではなかったのかという

推論をすることも可能である。一方で陸奥と常陸の国界に関しても、戦国時代には佐竹氏と白川氏の八溝山周辺の金坑を巡る紛争があったとされるなど、国界に変遷があった可能性は充分に想定することができる。

(六) 阿武隈山地とは、北は宮城県と福島県の県境付近、南は福島県と茨城県の県境付近にまたがる、南北に約200kmの細長い地域のことである。八溝山は阿武隈山地の南端に近い一部である。

(七) この那須連峰周辺は、三本槍岳の1917mを最高峰として、1500m以上の山々が軒並み続く有数の山岳地帯である。これらの尾根を結ぶ栃木県と福島県の県境は分水嶺となっており、南側は那珂川水系として太平洋へ、北側は阿賀野川水系として会津を経由して日本海へと注いでいるわけであり、本州の屋根とでも言うべき様相を呈している。

(八) 栃木県と福島県の国境という見地に立てば、これは久慈川の水源である八溝山と阿武隈川の水源である那須連峰を結ぶ分水嶺によって画されており、この周辺の国界と分水嶺の関連の深さを見て取ることができる。

(九) 八溝山周辺の地勢に関しては、金谷兼男氏『八溝山塊周辺の境界神考』の「二 上世における八溝山周辺の道路考」に詳しい。

(十) 宮田登、宮本袈裟雄編『日光山と関東の修験道』（名著出版、2000年、第四刷）に所載、藤田定興氏『八溝山信仰と近津修験』

(十一) 「八溝」の名の由来については諸説あるが、大きく分ければ二種に分類できようかと思う。一つは水戸光圀の命名と伝わる八溝五水（現在では日本の名水百選に選ばれている）の存在や、また本論でも述べたとおり、周囲を潤す久慈川や那珂川水系の水源となっていることから、「ミヅ」は川のこと（水流が地表を削る連想からか）で、ヤは接頭語と見なし、つまりこの地に源流を発する川のことであるという説、同じく八つの細流（溝）のことであるという説などである。もう一つは日本武尊が東征の折に、俗に「八溝八峯、八谷、五滝、三池、三水」と言われる複雑な景観を持つ八溝山を前にして、或いは悪鬼・鬼人が住むという伝承の影響か、「この先は闇ぞ」と言ったという面白い説も伝わる。

(十二) 廣瀬典著『白河古事考』天（堀川閑楓堂、1909年）

(十三) 『式内調査報告』第十四巻 東山道3（式内社研究会編纂、皇學館大學出版部、昭和61年2月）

(十四) 岩田孝三『閔址と藩界』（校倉書房 1962年）を参考にした。

(十五) 藤田定興『八溝山信仰と近津修験』では、『那須記』『大櫛郷大頭竜権現由来記』『八溝嶺神社略縁起』『板東三十三所觀音靈場記』『常陸國久慈郡板東二十一番札所八溝山日輪寺縁起』『那須國造と八溝の八岐大蛇退治』などの各文書を挙げている。

(十六) 『明治神社誌料』（講談社 1975年11月 明治神社誌料編纂所編 明治45年刊の復刻版）に因った。

(十七) 『式内調査報告』第十四巻 東山道3 に記載の『八楓神社所傳縁起』（福島県立図書館所蔵）に因った。

(十八) 蛇体と金の関連に関して、藤田定興氏はヤマタノオロチ神話と鉄文化の関係を例示している。また『加藤寛斎隨筆』には、「山中多金穴（俗曰魔符）土人云、古昔大蛇の住たる穴也といえる故に蛇の窟といえる。字蛇穴等の坪あり、いづれも金穴なるべくにや」とあるとおり、土中に穴を穿って住処とする蛇の生態から、金掘

りの穴を大蛇の住処と連想したと思われ、逆説的に蛇窪や蛇穴と名のつく場所は金穴であつただろうと推測している。

(十九) 板東三十三観音霊場の第二十一番札所・日輪寺は『坂東靈場記』に「春夏巡礼のはか、尋常の往来なければ熊笹一面に生茂り、更に道の縁分ち難し」とあるほどの坂東札所第一の難所であり、八溝山に登らずに遙拝ですましてしまう者がいたと伝わるほどで、それを揶揄して「八溝知らずの偽坂東」と言ったという。

(二十) 開山は天武朝（673年）に役行者によってと伝え、『八溝日輪寺旧記書類写』によれば大同2年（807）に弘法大師が八溝川の流水に香気と梵文とを感得され、再建したという。

(二十一) 那珂川流域の古墳・遺跡については、例えば那須地区だけでも旧石器時代～古墳時代の遺跡として、那須町の七曲遺跡、西那須野町の楓沢遺跡、太田原市の平林真子遺跡、黒羽町の川木谷遺跡、小川町の那須八幡塚古墳、駒形大塚古墳、馬頭町の川崎古墳、唐御所横穴、烏山町の宮原遺跡、などがあり、枚挙に暇がない。

(二十二) 那須国造碑文にある「広氏」が「広来津公」ではないかと考えられることから、豊城入彦命の後裔が那須国造となった可能性がある。この豊城入彦命の一族は三輪山の大物主命を祀るとされ、その証拠として当時の那須国統治の中心であった小川町には三和神社の存在が確認されている。これが第十二節での「建鉢山に祀られていた神は豊城入彦命の一族が奉する大物主命ではなかったか」という推察と結びつき、考察を深めれば関東と奥州の境界考に何らかの視点をもたらすものと思われる。

(二十三) 旧陸羽街道は概ね現在の国道294号線と重なるようである。

(二十四) 旗宿道の利用年代については、白河関の創設が五世紀初頭にまで遡る可能性があることから、それと同時期か、もしくはそれ以上に遡ることになる。そして白坂道が重要視され始めたことを示すのは、豊臣秀吉が奥州下向の折りにこの白坂道を通ったとされることが端緒であるようである。後の徳川時代に入っての街道整備に従って、奥州街道の駅宿として白坂宿が数えられるようになると、これは明らかに官道としての役割を果たしていたはずで、つまりそれまでは主に旗宿道のほうが主街道だったのであろう。

(二十五) これは藤田定興氏が『八溝山信仰と近津修驗』の中で指摘していることであるのだが、近隣菊多郡は五郷、磐瀬郡は七郷、安積郡は八郷であるのに比べ、白河郡は十七郷によって成り立っており、これは明らかに大きな郡であると言えるだろう。

(二十六) 松平定信（1758-1829）は幕府老中（任期は1787-1793）として寛政改革を断行した政治手腕で有名であるが、1783年より家督を継いで白河藩主となっている。松平定信は政治手腕だけでなく文化人としても超一流で、生涯を通じて百数十部に及ぶ著作を残し、その内容も自叙伝から政治論、和歌集、隨筆、古書画・古器物の模写編集など多岐にわたる。また日本で始めての公園である南湖公園の造営、藩校の立教館の設立・拡充、庶民学校の敷教舎の設立など、白河における文化的貢献度は計り知れない。

(二十七) 『那須町史』（注記・栃木県市町村史抜粋　那須町立図書館作成　栃木県町村会事務局著　栃木県町村会　1955年）の431頁に所載『境神社舊記』

(二十八) 『那須郡誌』那須郡教育会編纂（名著出版　1974年）

(二十九) 白河関跡前にある発掘調査に関する看板より一部切り抜いたもの（2004年　7月22日　撮影）

(三十) 岩田孝三氏『関址と藩界』（校倉書房　1962年）80頁などを参照。

(三十一) 廣瀬典著『白河風土記』天(堀川古楓堂 1932年)

(三十二) 『西白河郡誌』(福島県西白河郡協賛会 1911年)

(三十三) 白河関は古くから「二所ノ関」と呼ばれていたことから、その解釈を巡って多くの議論がなされてきた。この「二所ノ関」の解釈には、大きく分けて三通りがあると思われる。一つは『那須郡誌』に見られる「二所すなわち二ヶ所に關があつたのではないか」という説。二つには『白河古事考』に見られる「關が二重で嚴重であったから二所ノ関と呼んだのではないか」という説。そして最後に岩田孝三氏の「一ヶ所に男女二神を祀つていたことによる名称である」という説である。

(三十四) 廣瀬典著『白河古事考』天(堀川古楓堂、1909年)など。

(三十五) 依上の境の明神。八溝山のほぼ真南、国道461号線上の茨城県と栃木県の県境に位置している。祭神は栃木県側が常陸の鹿島神社、茨城県側は下野の湯泉神社であるとされており、これは自らの国の一ノ宮(湯泉神社は下野の内の那須で一ノ宮に相当する信仰のあった神社)の分祠を相手方に祀りあつたもので、岩田孝三氏の見解に因れば、自國の一ノ宮を自國に祀るのであれば境の神の形式としてしばしば見られるが、自國のものを相手方に祀るというのは珍しいとのことである。

(三十六) 大洪村の境の明神。白河古事考には「大洪」とあるが、現在は「大塙」と書き、「おおぬかり」と読むようである。国道349号線(茨城街道)の福島県と茨城県の県境付近の明神峠という場所に鎮座している。神社名は旧陸羽街道の境の明神と同じく玉津島神社と住吉神社であるが、現在は白河関の白河神社のように社殿が一つしかない。『松屋筆記・卷百十五』には「左右の山の上に住吉・玉津島の二神、大社にてあり。」とあり、後に合祀されたのであろうか。その辺りの詳細は明らかでない。

(三十七) 例えば『白河古事考』に、「然れども諸國の一宮は國府程近き地に在口(ろに濁点)多き、近津(注:都都古和氣の別名)は國端にあれども名神大なれば、一宮と崇めるか」とある。つまり、古代律令祭祀制度の中で、遠隔地の班幣の困難さから国司による班幣の対象となる國弊社や名神制・一宮制が生まれてきたにも関わらず、なぜか国府からは遠い、奥州への入り口の白河に鎮座する都都古和氣神社が格社に選ばれている。

(三十八) 尤も、当時の記録に乏しい白河関が軍事上の最重要拠点であったと断定することはできないわけであり、つまりこれは白河関が文献に散見する著名な史跡であること、また他に軍事上の重要拠点が知られていないことに乗じた、観念論的な対比であることを断つておく。

(三十九) 藤田定興氏の『八溝山信仰と近津修驗』には「衆人社前ヨリ糸ヲ入タル藁苞ヲ乞受ルヲ例トスコレヲ都々古ト云此五日間ハ南ハ水戸笠間、北ハ伊達信夫、東ハ磐城ノ海辺、西ハ野州喜連川佐久山地方ヨリ參詣人群集ス」という八槻都都古和氣神社の記録が引用されている。

(四十) 但し、都都古和氣を「ツツコを分ける」と一義的に解釈してしまうと、同じ延喜式内社・白河郡七座の内の、石都都古和氣(いわつつこわけ)神社の理解が難しくなってしまう。石都都古和氣神社の神域内である八幡山には、その「石」の名の通り巨石が散在しているのであるが、しかしツツコ奉納の神事は伝わっていない。

(四十一) 少なくとも『八槻神社所傳縁起』と『馬場都々古別神社縁起』には記されていることを確認している。

(四十二) 式内社調査報告に記載の『八溝山奥院山王日光両社縁起』によれば、「亦曰、日本武尊陣中雲霧、深可出不知道、天神地祇、神口口（示に咒）震動天地、岐神出現而開道、我是猿田彦太神云」とあり、日本武尊の東征を助けた神の一人として、岐神すなわち猿田彦大神が挙げられているのである。

(四十三) 「当神社は、第二十五代武烈天皇の壬午の歳（502年）に、筑波山の西方、常陸と下総の国境に、大神様を奉斎されたと伝えられております。」と千勝神社ホームページにある。また続けて「社伝によると、その土地の人々が、度重なる水害に困り果てていたところ、大きな白鳥に乗られた大神様がご降臨され、治水して下さいましたので、農作物も豊かに実り、平安を取り戻す事が出来た、とございます。」とあるのは、近津神社が河川沿いや河川の合流点にあり、農耕神としての信仰が厚かった八溝山との関係が深いことを考えると、非常に興味深く思われる。

(四十四) 千勝神社の祭神としての猿田彦大神における境界的要素について。千勝満彦氏によれば、一つの考え方として、猿田彦大神の「教導・道開き・共存共栄」の御神徳が、違う土地や異文化との交流や混合を取り持つ故に、その媒介者として境界の神であると考えることもできるかもしれないとのことであった。

(四十五) 戸田有二編『古代祭祀 建鉢山遺跡』本文編（吉川弘文館、1998年）

(四十六) 大物主命は三輪山の伝承などでは蛇体であるとされるが、第五節での藤田定興氏の考察に因れば八溝山に住む悪鬼・鬼人も蛇体である場合が多くいた。大物主命が悪鬼・鬼人と同一である、又は直結するというわけでは勿論無いが、重なる部分があるのは興味深い。またこの地における大物主伝承の意義に関しては、註の（二十二）も参照のこと。

(四十七) 大物主命が三輪山の神奈備の祭神であることは知られているが、國學院大學日本文化研究所編『神道事典』の「アジス（シ）キタカヒコ〔ネ〕」の項に因ると、『出雲国造神賀詞』にはオオムナチが味耜高彦根命を葛木の鷦の神奈備に祀るように指示したとあるとのことで、つまり大物主命と味耜高彦根命は神奈備の祭神としての共通点も持っていることになり、これが混同された可能性が無いとも言い切れない。

以上